

大学生のスポーツ参加の〈場〉の実証的研究

—— 転換期を迎えた大学の保健体育科目との係わりの中で ——

荒 井 貞 光

広島大学総合科学部保健体育講座

(1990.10.31受理)

**A Possitive Research of "Occasion" on which the University Students
come to participate in Sports**

—— **In Relation to the University Course of Health and
Physical Education which faced the Turning Points** ——

Sadamitsu ARAI

Abstract

The "Occasion" which people come to participate in sports has extended remarkably. That is the same in case of the University Students. The purpose of this study is to clarify on what "Occasions" they come to participate in sports by the social technic of questionnaires.

We have two view points. One is to find out the tendency of diversification of "occasion" and the second is the evaluation and the estimation in the future. We analyse the date of 1680 students of 38 University in Japan.

We have made the questionnaires in 1989, and got the date from 1680 student of 38 University in Japan.

The results are as 4 points :

- 1) The percentage of student who have "occasion" without "physical activities class" and play physical activity over per a week is 45.5%.
- 2) We can point out the declining tendency that students doesn't participate in the traditional university sports occasion as "Taiikukai Undobu".
- 3) Surely, many students come to participate in sports in various occasion. But they don't play sports activity with satisfaction.
- 4) Considering the evaluation of the university course of health and physical they evaluate physical activity lesson at higher level than physical and healty theory.

The summary of the result is to find out the tendency of diversification in relation to the "occasion" which university students participate in sports. And so, considering this tendency, the course of physical education and school sports in university is facing the turning point.

問題

スポーツの社会学，特に米国流のスポーツ社会学の重要な概念の一つが，“Sports Socialization”であることにスポーツ社会学研究者ならば，異論はなからう。個人がどのようにスポーツに動機づけられ参加するようになるか，またそのことで個人がどう変容するかは，1970年代後半以降のわが国のスポーツ社会学の調査研究のメジャーなテーマであった。先行研究「スポーツ行動に関する実証的研究」(1)(2)(3)(4)を継続する中で，筆者なりに認識したこのスポーツ社会化の問題意識は，スポーツが社会変化の影響を蒙るというステージに代り，社会がスポーツ文化により影響を受ける，そういう時代，いわば「生涯スポーツ化の社会」(5)というステージにいれ替わるべきという必要性であった。先行研究(3)(4)では，種目や集団を選択する可能性を論じたのに比べて，先行研究(5)では，〈場〉というやゝ抽象的な操作的概念をもちこむことで，社会の中に複数のスポーツ参加の時空間が共存，競合する時代に入ったことを暗示してみたのである。

さらに，(6)においてそれらの変化の根本にあるものとして「スポーツ参加が極めて複雑化—複雑化，複層化してきている事実」をあげ，「それらの傾向が強くなればなるほど，それに関わる制度や組織，また集団は閉鎖化し始め，“タコツボ”化の度合を強めている」(6)と問題提起を試みた。特に先行研究(5)(6)は，学校体育に関する諸制度，集団のあり様に底触せざるを得ず，従来のスポーツ社会化のメカニズムは，〈授業〉の場の作用が重要であったのに比べて，スポーツ化社会ではむしろ〈脱授業〉の傾向にあることを数量的に確定した。

これら一連の先行研究を通じて整理できることは，生涯スポーツ化社会の“豊かさ”とはスポーツでいえば何かという問いに対する答えである。それは，個人がスポーツ参加の場を複数ある選択肢の中からチョイス（選択）できる可能性を有した社会システムということではないか。学校体育にかかわらせていうと，学校制度の中でしかスポーツや体育を普及，振興できなかった段階から，学校体育も一つの〈場〉として包含されるような総合的なスポーツ参加のシステムを整備，充実していく段階にさしかかったということになる。

ところで従来の調査研究においては，調査実施上の制約，日本のスポーツの歴史的制約等から中学生，高校生，一般社会人が対象者であることが多かった。むしろ，これまで述べてきたスポーツの〈場〉をチョイスする可能性の問題などは，“大学生”という社会階層に極めてリアルに現われている。例えば，体育会運動部から同好会へという〈場〉の複数化の流れをあげれば十分であろうし，保健体育科目という〈授業〉の場がいわば“揺さぶり”を受けている「大学設置基準の大綱化」という現実の問題もそれに含まれる。学校の体育とスポーツの問題は，小学校から高校までの受験体制や勝利至上主義などに対する有効な解決指針を見だせないまま，大学生の体育やスポーツの場にそれらの問題がもちこまれたと解釈できなくもない。

以上先行研究との関連で述べてきたように，大学生のスポーツ参加をそれに関わる〈場〉の関連でとらえようとする試みは様々な意味や意義やをその背景に持っているともいえる。本論文では本テーマに関する調査研究で得られた数値を中心にして，大学生のスポーツ参加の現実をできるだけ細かく明らかにしたい。そのことを通して，わが国のスポーツ社会化の問題も学校という枠組からどのくらい離脱できているか，またできそうかの現実と予測が若干可能になると思われる。同時に，急展開するといわれる大学の保健体育科目の将来的プラン等も，大学生自身のスポーツ参加の現実と彼らの意識をぬきには論じられないと思うからである。

方 法

1. 視点

次に述べる視点から主にデータを整理して分析する。

1つは、大学生のスポーツ活動は実際にどのような〈場〉で行われているか。頻度、活動の〈場〉とスポーツをしている時の意識等はどうか。現在、必須科目として位置づけている体育実技の〈授業〉の存在理由として、「授業の他には運動する場がない」がよく持ち出されてきた。それは現在も正しい認識かどうか等。

2つめの視点として、1つめの視点から明らかにされた、現状の認識をふまえ、若干の将来予測を行いたい。〈場〉に対する評価の違いはどこにあるか。一つは〈場〉に参加する者は他の〈場〉をどう認識しているのか。また大学生にとって制度的に保証されている〈授業〉の場に対してはどう反応するか。大学生は流行や時代の感性に最も敏感な階層とされるが、いわば“パイロット”的なスポーツ消費者として彼らを位置づけながらスポーツ参加の将来の動向を探りたい。

2. 方法と調査対象者

大学生活の中のスポーツ活動と体育授業に関する65項目から構成されるアンケート票を用意した。内容は、所属学部、居住形態など対象者自身の生活状況の質問項目、スポーツ活動の頻度、活動の場などスポーツの実施に関する質問項目、体育の授業、実技と保健体育理論の評価や感想等に関する質問項目、保健体育科目の将来予測に関する質問項目から構成された記入式のアンケートである。本論文では、先に上げた2つの視点に主に関連する項目をとりあげて分析、報告する。

調査対象者は、調査実施上の制約条件、調査目的から、大学の2年生を対象とした。また特定の大学に偏らないようにするため、全国の大学生に広く実施することをねらいとし、約50校、2000人を上限とし、サンプリングに入った。調査を実施する段階では、期間、大学の事情、人間関係、予算等、種々の制約条件が介存する。表1は、調査協力を得、実際にアンケートの配布と回収を行ってくれた大学名の一欄である。(実際に調査をしてくださった先生方のお名前をここではあげられないが、心よりお礼申し上げる次第である)

表1 調査対象学生所属学校名一欄

北海道大学	近畿大学	東京工業大学
東北学院大学	京都教育大学	西日本工業大学
帝京大学	岡山大学	安田女子大学
東京大学	福山大学	宇都宮大学
東海大学	尾道短期大学	文教女子大学
上智大学	梅光女学院	立命館大学
信州大学	山口女子大学	広島工業大学
三重大学	島根大学	筑波大学
天理大学	九州大学	広島経済大学
福山市立女子短期大学	鹿児島大学	広島修道大学
就実女子大学	福岡教育大学	広島大学
香川大学	福岡大学	
愛媛大学	鹿屋体育大学	

表2 アンケート依頼の説明書

1. 実際にはアンケートの配布—実施—回収をしていただき、こちらまで返送する作業をしていただきたく、他にはご迷惑をおかけいたしません。
2. お願いする対象者は50人で調査の内容上、2年生にしばらく、昨年1年間をふり返ってという形をとってください。全国の50大学にお願いしています。
3. 実施の方法は、授業の時間に直接、あるいは前後等でお願します。家へ持って帰ってやる場合は、回収率が悪くなると思われまますのでその辺りの注意をおねがいします。
4. 実施してもらうクラス（種目）の指定は特にありません。先生の担当クラス（種目）を中心に、やりやすい対象を選んで下さい。但し、2年次生におねがいします。
5. 終わりましたら、回答だけを返送用の封筒に入れ、6月一杯にこちらへ届くようにお願い致します。
6. 結果は学校名を出すことは絶対にありません。集計が終わり次第、結果をご報告致します。

表2は、調査協力校の担当者に対して依頼した調査を実施する上での説明書である。

全国50大学にわたる調査をいわば個人的ネットワークで行うという条件の中で一番問題になるのは調査対象者の選定の客観性である。クラスの指定等は、担当者の教師に一任する方法をとっているため、その一校のみのサンプリングをとり出せば、特定のクラス—種目選択者の回答というところで偏りはあることは否めない。しかし、全国50校にまで広げた場合、結果として得られた種目選択者の内訳には偏りはみられない。調査結果をみても1988年度前期に受講した選択種目は36種目、後期は39項目にのぼっているからである。分析に適切なレベルのサンプリングの客観性は保持できたとみなせよう。

調査は、アンケート等の作成が1989年2～3月、調査対象校の決定、依頼状の発送等が3～4月、実際にアンケート票を調査担当者へ配布、郵送したのが4月である。大学生による実際のアンケートの記入は、調査担当者の授業中に行われたケースが多い。体育実技が雨の時にいったとか、授業を早めに済ませて行ったとか種々の場合がありそうである。従って、アンケートの回答時期は1989年4月～6月という期間として括らざるを得ない。さらに1つ問題があるのは、学生がアンケートに回答する時の状態が特殊であるか否か、すなわち一種のバイアス（圧力）が“授業中”“教師の前”という条件の中でかかったのではないかである。アンケートの回答等は無記名であるのでそれは心配はないと言うしかないが、この点に関しては、それ以上の詮索はできない。

アンケート票の回収等について、表3に示す。

表3 アンケート票の回収内訳

調査依頼校	調査協力実施校	分析上での有効アンケート総数	内訳数			
			広島大学	他大学	国公立	私立
47校 (学部が異なるケースが1校、 分校のケースが1校)	38校	2308人	594人	1680人	53.6%	46.4%

男	女	4年制大学	短期大学	文科系	理科系	教育・体育系
54.8	45.2	94.0%	5.7%	42.2%	35.8%	22.0% (体育系5.8%)

依頼した他大学の担当者の事情（海外出張等）により実施校は38校になった。アンケート総数の内訳に示したように、広島大学では集中して13クラスで実施し594の有効アンケート票を得た。他大学の場合は、一校につき依頼した50名をほぼ実施して頂き、1680名のアンケート票を得た。全国調査という目的を考えた場合、アンケートの総数をどれにするかの問題が残る。総合計の2308は、広島大学のアンケート数594が多量に含まれている。全国の平均的な数値をみていく場合は、全国38校から約50名前後の大学生に協力してもらった総数1680を採用する。しかし、クロス集計等で、例えば運動部所属者と他クラブ所属者の比較という場合は、広島大学の特殊性はそれほど著しく影響しないと思われるので、2308の総数を利用したい。いずれにしても、分析や考察の際に、必要に応じてこの点については配慮するつもりでいる。

結果と考察

1：スポーツ参加の〈場〉の実態

大学2年生の場合、19才～20才の年齢層が多いと思われる。まず彼らは、どのくらいの程度で運動、スポーツをしているか。実際の質問を「昨年4月から1年間を平均してどのくらい運動、スポーツをしましたか。ただし、体育の授業はいれないでください」と表現した。体育実技の〈授業〉の場以外にスポーツ参加の〈場〉があるかを、大学へ入学した昨年の一年間を通して回想させ、回答させた。

表4 年間平均の活動頻度（％）

	ほとんど毎日		1日おき		週に1回～2回		10日に1回～2回		月に1回～2回		年に1回～2回		まったくしない	
	20.3	11.2	7.5	6.2	33.9	35.3	7.3	6.0	14.1	15.6	8.9	14.8	8.0	10.9
全体	15.1		5.9		33.9		7.1		15.2		12.6		10.2	
性別	20.3	11.2	7.5	6.2	33.9	35.3	7.3	6.0	14.1	15.6	8.9	14.8	8.0	10.9

※ 体育実技の〈授業〉は外して回答させている。

※※ 全体の欄の数値は、全国調査のサンプル（以下Aサンプルという）。

性別の欄の数値は、広大を含めた全国調査（以下Bサンプルという）のサンプル。

※※※ 性別欄には左が男性、右が女性。

表4の全体の欄の数値は、全国調査のサンプル（以上Aサンプルという）、性別の欄の数値は広大のサンプル594を含めた数値（以下Bサンプルという）である。

「まったくしない」グループが、10.2％、やや女性が多い。「ほとんど毎日」、「1日おき」「週に1回～2回」を合わせ、これを週レベルの活動グループとすれば、54.9％になる。「10日に1回～2回」、「月に1回～2回」を合わせ、これを月レベルグループとすると、22.3％になる。年レベルが12.6％である。男性に比べ女性は週レベルにやや少なく、その分、月、年レベルが多いこともわかる。

以上が、活動頻度の実態であるが、これらの数値を、他の先行調査（この種の調査は、大学内では実施されているかもしれないが、学会の場や印刷物の形で公表されたものは少ない）と対応させておく。1986年に岡山大学の学生2000～3000人に実施された同種の調査結果(7)をみると週レベルグループが47.7％（1回目）、44.8％（2回目）の数値を得ている。もちろん、これは〈授業〉の場以外での活動頻度に限定して質問している。1978年に九州地区の学生約5000名に対して行われた結果(8)によると、週レベルグループは49.5％になる。

この種の調査は、質問文や回答の選択肢にオマズライズドされたものがないので、各調査間の比較は適切でないが、前掲の3種の数値から類推すれば、大学生1～2年次生の週1回以上のスポーツ活動実施者の割合は、およそ45～55%の辺りとみなされるのではないか。

次に問題になるのは、どういふ〈場〉でスポーツをしているか。大学1年生の半数近くの者が〈授業〉の場以外に週レベルで運動、スポーツをしたというが、彼らは特定の集団、例えば運動部などへ所属している者ではないか。

表5 スポーツ活動を行う〈場〉(%)

	体育会の運動部		学内の同好会サークル		学内のスポーツ行事や大会		学外にある民間のクラブやサークル		学部内の運動部		1人でやる運動スポーツ		不明	
全体	23.5		32.8		11.1		11.7		1.0		13.8		0.1	
学校種別	28.8	20.6	34.6	25.0	10.2	12.7	5.7	18.6	3.4	0.2	17.3	23.0	0.1	0

※ 種別は左の数字が国公立、右が私立

表5は、〈授業〉の場以外で、運動、スポーツをする〈場〉があると答えたグループが、その〈場〉を選択肢の中から具体的に選んだ結果である。全体の結果からすると、「学内の同好会、サークル」32.8%、「体育会の運動部」23.5%、「一人でやる運動、スポーツ」19.8%、「学外にある民間のクラブやサークル」11.7%、「学内で行われたスポーツ行事や大会」11.1%、「学部内の運動部」1.0%の順になる。一般的にいわれる“体育会の低迷、同好会の隆盛”を数量的に明らかにできた。また別集計により、学校種別でみると、私学における“同好会志向”、“学外志向”、“一人志向”が読みとれる。

表5の結果は、〈授業〉の場以外に運動、スポーツする場があると答えたグループに対するサブ・クエッションである。「体育実技の場の他に運動、スポーツする場がありましたか」という先の質問項目の結果をみると、「ある」71.2%、「ない」28.3%になる。この数値と表5の結果から、大学生の各種の〈場〉への所属率を改めて算出してみたい。

表6 スポーツ活動の〈場〉(%)

〈場〉があるグループ (71.%)						ないグループ
体育会の運動部	学内の同好会サークル	学内のスポーツ行事や大会	学外にある民間のクラブやサークル	学部内の運動部	1人でやる運動・スポーツ	
16.7	23.3	7.9	8.3	0.7	14.1	29

※ 表5のパーセントを具体的な人数でおきかえ、1680人の全体の人数で割合を求め、再度、パーセントに直した。

※※ パーセントを人数におきかえる途中で四捨五入した関係で若干数値が表5と異なる。

表6がその結果である。不明、無記名者を除き、〈場〉があるとするグループが71%、ないグループが29%となった。「学内の同好会、サークル」23.3%、「体育会の運動部」16.7%、「一人でやる運動、スポーツ」14.1%、「学外にある民間のクラブやサークル」8.3%、「学内のスポーツ行事や大会」7.9%、「学部内の運動部」0.7%となった。全国的な範囲で、大学生のスポーツ

参加の〈場〉を数値で示した資料は他に見あたらない。

さて、性差、学校種別の差について、若干のコメントを述べてきたが、地域差などは著しい差がでよう。例えば、東京都内の跡見学園短期大学の場合、学内運動クラブの所属者が34%に比べ、学外サークルへの所属者は62%にもものぼるといふ(9)。これらの差を考慮しなければならぬと思うが、現時点で得られる表6の結果は、〈場〉の問題を考える基本資料としてある程度の妥当性を有するのではないか。

次にそれぞれの〈場〉ごとの活動頻度を算出してみる。一般的にいわれる健康と体力の維持、増進の最低レベルの基準といわれる週レベルの活動は保たれているのだろうか。

表7 〈場〉ごとの活動頻度 (%)

	ほとんど毎日	1日おき	週に1回〜2回	10日に1回〜2回	月に1回〜2回	年に1回〜2回	まったくしない
体育会の運動部	63.7	16.7	13.2	2.1	2.1	1.4	0.9
学内の同好会、サークル	7.0	9.5	53.0	9.3	14.4	5.5	1.3
学内のスポーツ行事や大会	2.7	1.1	32.6	4.9	21.2	29.4	8.2
学外にある民間のクラブやサークル	5.5	2.4	42.4	10.9	24.2	12.1	2.4
学部内の運動部	23.1	41.0	28.2	5.1	2.6	0	0
1人でやる運動、スポーツ	7.2	2.2	33.5	10.7	27.6	16.3	2.5

※ Bサンプル

表7の結果を、週レベル頻度の割合にしぼってみていく。「体育会の運動部」所属者の場合93.6%は週に一度はスポーツをしている。同じようにみていくと、「学内の同好会、サークル」69.5%、「学内のスポーツ行事や大会」36.4%、「学外にある民間のクラブやサークル」50.3%、「学部内の運動部」92.3%、「一人でやる運動、スポーツ」42.9%となった。さらにこの数値と表6の結果を関連させ、大学生全体からすると、〈授業〉以外の場で週レベルの活動を充足させている人数がどのくらいいるかを算出してみる。

「体育会の運動部」263人、「学内の同好会、サークル」272人、「学内のスポーツ行事や大会」48人、「学外にある民間のクラブやサークル」70人、「学部内の運動部」11人、「一人でやる運動、スポーツ」101人、合計765人となった。Bサンプルの場合の総人数は1680人であるので、最終的には次のような数値を示すことができる。すなわち、大学生の45.5%のグループは、週レベルで行うスポーツ活動の場を持っているということ、逆に54.5%のグループが、場を持つと持たないに関わらず、週レベルの活動に至っていないということである。図1を今までのまとめとする。すなわち、〈授業〉以外に、現在の大学生（主に1年生）の場合は、45.5%の者が週レベルの活動の〈場〉を持っているということになる。以上の算出方法、また結果の数値は、Aサンプル、Bサンプルを合わせて利用する形になっている。その点では誤差を生じやすいかもしれない。しかし、現時点では他に得られるデータがないので、大学スポーツ、大学生生活の問題やあり方を考える上で一つの目安として位置づけたい。すなわち、図1からいえることは、従来の体育実技の

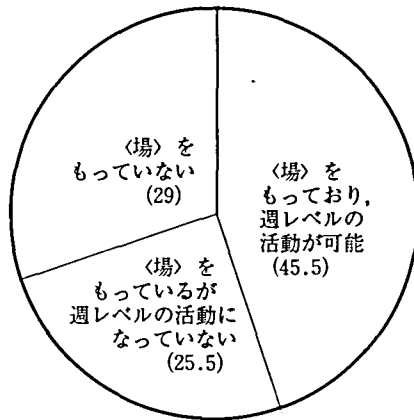


図1 大学生のスポーツ活動の〈場〉と週レベルの活動頻度の関係 (%)

〈授業〉では、この3つのグループを一括して“必須科目”という制度の下で各種のスポーツ種目を実施させてきた。体育実技の必須という制度は、どのグループによく機能し、あるいは機能失調に陥らせていたのだろうか。またこれからの〈授業〉はどのグループに焦点づけるべきか等々の問題が生ずると思われる。

ここまでは、〈場〉の問題を活動頻度との関係からとらえてきたが、次に〈場〉に対する意識の問題からみしてみる。

表8 〈場〉と満足感 (%)

	満足	どちらでもない	不満
体育会の運動部	63.8	20.9	15.3
学内の同好会、サークル	55.8	28.7	15.5
学内のスポーツ行事や大会	28.2	40.6	31.3
学外にある民間のクラブやサークル	68.5	20.7	10.9
学部内の運動部	65.8	18.4	15.8
一人でやる運動、スポーツ	48.9	27.9	23.3

表8は、〈場〉ごとの満足感をそれぞれ聞いている。「満足」と答える割合が高い順にいうと、「学外にある民間のクラブやサークル」68.5%、「学部内の運動部」65.8%、「体育会の運動部」63.8%、「学内の同好会、サークル」55.8%、「一人でやる運動、スポーツ」48.9%、「学内のスポーツ行事や大会」28.2%となる。この結果をどう評価するかである。「どちらでもない」を加えれば、7～8割近くの者が現状には肯定的とみなせよう。けれども、スポーツ参加の〈場〉は、

自らの選択や主体性が第一義的なものであることからすると、表6の結果から所属の割合が最も高い「学内の同好会、サークル」にしても“同好会隆盛”とマスコミがもち上げている割には満足感は低いといえ、また、「学内のスポーツ行事や大会」、「一人でやる運動、スポーツ」層の低さも気になる所である。この結果を補佐する意味も含め、それぞれの〈場〉ごとの活動内容について、参加者はどのように評価をしているかもみておく。

表9 〈場〉と活動内容の評価 (%)

	練習も好きでよくやるし、クラブのムードや仲間も好きだ	練習は好きだがクラブのムードや仲間は好きではない	練習はあまり好きではないがクラブのムードや仲間は好きだ	練習はあまり好きではないし、クラブのムードや仲間も好きではない
体育会の運動部	46.4	7.2	39.7	6.7
学内の同好会、サークル	53.3	10.5	29.7	6.5
学内のスポーツ行事や大会	22.6	25.8	32.3	19.4
学外にある民間のクラブやサークル	57.6	8.7	27.2	6.5
学部内の運動部	63.2	7.9	26.3	2.6
一人でやる運動、スポーツ	40.5	19.1	33.3	7.1

※ Bサンプル

表9では、〈場〉の内容を「コートの中」、「コートの外」概念(10)をふまえ、2つの空間にどのように適応しているかを具体的に聞いている。2つの空間に共に適応しているタイプ、「練習も好きでよくやるし、クラブのムードや仲間も好きだ」にしぼってみると、「学部内の運動部」63.2%、「学外にある民間のクラブやサークル」57.6%、「学内の同好会、サークル」53.3%が50%を越える。先にも述べたが、スポーツ活動の〈場〉の本来の性格からすると、これらの数値もやや低いように思われる。それらの低さを補うように、「練習はあまり好きではないが、クラブのムードや仲間は好きだ」という「コートの外」への適応で満足するタイプの比率が出ている。各種の〈場〉に参加している者の全体を通して「とても満足している」、「満足している」の合計は58.5%に留まり、この結果を合わせても、〈授業〉以外の〈場〉の評価は思ったほど高くない。一方、〈場〉をもたないグループの29%の大学生は現在の活動量に対して「満足」層は13%、「どちらでもない」33.2%、「不満」層が53.9%となっており、〈場〉のないグループはそれで満足しているわけではないことが明らかになった。

以上、表4～7、図1において〈場〉の量的な問題を扱い、表8、表9において得られた数値から、〈場〉へ関わる大学生の主観的な評価の問題を検討した。対象校は4年生大学が94%と大部分であるが、彼らの場合、スポーツ参加の〈場〉は〈授業〉の他に7割近くの者が持っている。しかし、それが週レベルの活動を可能にしているかという点、週レベルの活動者は50%に達していないこと、主観的な評価も現状を肯定し、満足する割合は〈場〉の人間関係的側面を除くと50%を少し上まわる程度にしか過ぎないこと、これらが今回の調査視点の一つめの結論である。関連する先行調査がないので時間的推移がわからないが、〈授業〉以外のスポーツ活動の〈場〉への大学生の参加の増加傾向は経験的にも認められる。活動の量と同時に、表8、表9で示したような参加者の意識を充分考慮しつつ、〈場〉ごとの充実を図っていくこと、そのための調査研

究、指導、助言を専門家、関係機関が積極的に行っていくことが今後の大学生のスポーツにとって不可欠なこと、それだけは言えるのではないか。

2. 〈場〉の将来予測と〈授業〉との関連

大学生のスポーツ参加を〈場〉の視点より整理し、その量的、質的問題について触れてきた。ここでは、その実状をふまえ、これからのことについて視点を移す。

表10 〈場〉への参加の希望 (%)

	体育会の運動部	サークル 学内の同好会・	事や大会 学内のスポーツ行	学外にある民間の クラブやサークル	学部内の運動部	一人でやる運動・ スポーツ	ない
参加の希望	3.6	20.1	9.9	36.3	1.0	28.9	0
参加の実状	16.7	23.3	7.9	8.3	0.7	14.1	29.0

表11 〈場〉への参加の伸び率

学外にある民間の クラブやサークル	一人でやる運動・ スポーツ	学部内の運動部	事や大会 学内のスポーツ行	サークル 学内の同好会・	体育会の運動部
4.4	2.0	1.4	1.3	0.9	0.2

※ 下欄は表6の結果

表10は、「あなたがこれから運動、スポーツをする場合、最も強くやりたい場を1つあげてください」という質問文の下に回答してもらった結果である。現状と著しくギャップのある結果となった。「学内にある民間のクラブやサークル」36.3%、「1人でやる運動、スポーツ」28.9%、「学内の同好会、サークル」20.1%の3つの〈場〉が多く、現実にも多い「体育会の運動部」の場合、3.3%と非常に低い割合となった。また〈場〉への参加希望が「ない」に対する答が皆無であることも注目される。単純な算出方法だが、参加希望の数値を参加実状の数値で割ることで、伸び率を出し、将来予測の一つの目安とする。表11に、伸び率の高い順に並べている。このように整理すると、あらためて、〈場〉ごとの盛衰が明らかになる。先にも触れたように、「体育会の低迷」は明らかで、「同好会の隆盛」といってもその内容は、「学外志向」であること、さらに「1人志向」が明白になった。なお、この傾向は、男子学生よりも女子学生に、国立大学よりも、私立大学の学生に顕著である。また、大学1年生と2年生（アンケート調査の実施時期では2年生と3年生）を比べると、1年生よりも2年生の方にこの傾向は強く認められることも特長である。〈学内→学外〉〈集団→1人〉の移行の傾向は、成人男女のスポーツ集団への参加傾向を調査したレポートの際にも触れた。「現代人の参加の心情——帰属したいが縛られたくない」(11)というスタイルが大学生の場合もあてはまるのだろうか。それとも、活動場所の確保や友人を求める上でチャンスが多い、それだけの理由からか。あるいは、競技レベルを高める上でも学校運動部から学外のクラブへ移行すべきという中学生や高校生の意識の反映だろうか(12)。スポーツ集団の学外志向化は、いろいろな意味を帯びながら、ますますその度合を強めよう。

表12は、表10の結果をBサンプルも合わせて集計し、それぞれの〈場〉に参加しているグループごとにどの〈場〉を希望するかを示している。現在参加している〈場〉をこれからも希望する割合の高い順に整理しよう。半数を越える希望がある〈場〉は「学外にある民間のクラブやサークル」53.3%、「学部内の運動部」50.0%（但し、このケースはサンプル数が39と極端に少ないので、他の〈場〉とは同列に比べられないだろう）だけである。続いて、「学内の同好会、サークル」が47.7%、「1人でやる運動、スポーツ」が41.9とやや多いが、他の〈場〉の場合の希望

表12 〈場〉ごとの参加者による希望 (%)

	体育会の運動部	学内のサークル 同好会・	学内のスポーツ 行事や大会	学外にある民間の クラブやサークル	学部内の運動部	一人でやる運動・ スポーツ
体育会の運動部	25.0	19.7	7.9	27.6	0	19.7
学内の同好会、サークル	4.6	47.7	8.3	19.7	1.5	18.2
学内のスポーツ行事や大会	2.1	18.6	20.0	29.7	3.5	26.2
学外にある民間のクラブやサークル	0	16.0	10.7	53.3	1.3	18.7
学部内の運動部	0	0	0	0	50.0	50.0
一人でやる運動、スポーツ	3.4	14.1	4.2	35.0	1.5	41.9
ない※(場の所属はない)	2.9	23.8	11.1	32.6	0.6	28.1

※ Bサンプル
 ※※ 縦の欄が現在の所属

は分散する。表12の整理を通していえることは、現在何らかの〈場〉に所属してスポーツをしているグループも、その〈場〉へのいわば“定着率”はあまり高いとはいえず、逆に他の〈場〉への志向が高く、流動的だということである。

これまで述べてきた〈場〉の将来予測と直接関連しないが、体育実技の〈授業〉も自主的、主体的に選択できる一つの〈場〉として位置づけた場合、そこへの大学生の反応はどうかをみておくことにする。「体育実技が必須科目から外れて選択科目になった場合、受講しますか」という質問文で行った調査である。結果は全体からすると「とる」62.0%、「とらない」16.3%、「わからない」21.3%、「不明」0.3%となった。先行する調査研究の中から類似した質問項目と結果をあげる。岡山大学は、「現在体育実技は必須ですが、もし選択制であった場合、あなたは体育実技の単位を取ったと思われますか」という質問をしている。「3回以上とる」18.6%、「1, 2回はとる」69.2%、「全くとらない」11.0%となっている(7)。また調査年度が1978年で古くなるが、九州地区の大学を卒業した20代から40代の社会人に対し、学生時代の〈授業〉が卒業後どのくらい役立つかという視点から、体育実技の必須制度の是非を聞いた結果がある。「必須科目でよい」84.6%、「選択」14.6%、「廃止」0.8%となっており、圧倒的に現行制度支持が高い。また高年代ほど「選択」の率が上がっているとコメントしている(8)。他のデータが得られないので、比較が十分にできない。〈授業〉の場が選択になったとしても、運動部やサークルと同じような感覚で学生が選ぶだろうかという判断はしにくい。〈授業〉の内容のよさ悪さを第一に受講を決めるかという、限られた授業時間の中での判断は他にも条件があるだろうから、そう単純にはいえないと思う。ここではこれ以上の論議はさし控え、選択する学生、選択しない学生の特長を〈場〉の関連から整理することにする。

「とる」学生は、女子学生(56.6%)より男子学生(66.3%)に多く、入学2年目(60.9%)より3年目以上(68.7%)に多く、また、私立大子(57.2%)より国立大子(64.5%)に多い。〈場〉があるグループは66.4%が「とる」と答えるのに比べ、ないグループは50.9%が「とる」と答えるのに留まる。〈場〉がないとするグループの方に「とる」が少ない事実は注目される。

表13は、〈場〉があるグループごとに〈授業〉の選択度を整理したものである。「体育会の運動

表13 〈授業〉に対する選択度(%)

	とる	とらない	わからない
体育会の運動部	72.0	11.2	16.8
学内の同好会, サークル	71.2	12.3	16.5
学内のスポーツ行事や大会	60.8	13.3	26.0
学外にある民間のクラブやサークル	63.8	17.8	18.4
学部内の運動部	42.1	34.2	23.7
一人でやる運動, スポーツ	58.5	17.0	24.5

部」所属者が72.0%と最も選択する比率が高い。体育会に入る学生は一般的にはスポーツが得意だとすると、体育実技の〈授業〉はやはり得意な学生がとるということだろうか。「学内の同好会, サークル」所属者も71.2%と高い。逆に「学部内の運動部」「1人でやる運動, スポーツ」グループは50パーセント前後というところである。これらの数値の結果をつきつめていくと、現実の〈授業〉の場がどういうタイプの学生に機能しているかが推察されよう。また、表8の満足感の評価は同じように〈授業〉の場でも行なわれる必要があるが、今回は実施できなかった。しかし、今回のアンケートの中で、〈施設〉〈教師〉〈グループ〉〈内容〉〈時間〉の各条件ごとに評価している。因みに全般的には55%前後でそれぞれの条件は「良い」とする評価を得、「悪い」は10%弱という結果になっている。(ここでは紙数の関係で〈授業〉の各条件ごとの評価については触れられなかった。他の機会に、至急報告したい。)

以上、視点(2)においては、先ず表10, 表11, 表12で、〈場〉ごとの希望をとり出し、大学生がスポーツに参加する〈場〉の将来の動向を推察しようとした。結果からすると現在の大学の体育スポーツに関する制度や施設からはみだしたり、またとらえにくいグループがむしろ多数であることが判明した。これらの結果は〈体育会の運動部〉に対する大学の位置づけや期待、また関係機関、専門家の関り方の修正を迫るものと言えなくもない。同じようなことは〈授業〉の場についてもいえる。〈授業〉の場とその他の〈場〉は同列に論ずべきではないという本質論に関わる意見もあるが、その議論を細かく始めるよりも、大学生の周りに存在する様々なスポーツ活動の〈場〉の実態を把握し、認識することの方が現実的であるし、また〈授業〉の場の現代的な意義を自ずと浮かび上らすことになるのではないかと思われる。

総 括

大学生のスポーツ参加を〈場〉という観点から、質問紙調査法により探り、その問題と課題を抽出しようと試みた。

- (1) 〈授業〉の場以外に、スポーツ活動の〈場〉を有し、しかもその活動頻度が週レベルの学生の割合は、全体の45.5%である。10代後半から20代へかけて、健康の維持、増進のためには少なくとも週レベルの活動は必須といわれる。それを第一義に据えた場合、大学1, 2年生の2人に1人は〈授業〉の場以外に適当な〈場〉を持っていないという現実をどのように認識すべきか。一方で、学校外のスポーツ状況を観察した場合、全ゆる年齢階層にわたり、活

動の〈場〉の「複雑化、の傾向は進行していると思われる。それからすると、「2人に1人は〈授業〉の場以外に適当な〈場〉を持っていない」というデータも発想的には逆に2人に1人は活動の〈場〉を持っているという事実をこそ肯定的に受けとめ、それらの〈場〉の個性化、充実化に努力すべきではないか。

- (2)大学生の伝統的なスポーツ活動の〈場〉である「体育会の運動部」は現在の所属率においても、参加の希望率においても、低落傾向は一層明白になった。「学内の同好会、サークル」、さらにそれを数倍上まわる勢いで「学外にある民間のクラブやサークル」への志向性が顕著である。従来、大学生のスポーツは、個々の運動部を統括するいわゆる体育会組織が、財政、企画、研修等の面において中心的役割を担ってきた。当然、そのラインから外れる同好会やサークル、また学外のグループへの関与はされることなく今日に至っている。しかしながら、今回の全国調査から得られたデータは、体育会運動部、同好会、学外グループ、さらには学内の諸行事、個人的活動と分散、多様化したスポーツの〈場〉的な再編を求めているのではないか。センター的役割を担うのがどこに、誰になるのか。センターという場合、全ての〈場〉を一元的に統括する「富士山型」組織か、あるいはテニスならテニスの運動部と同好会が部分的にジョイントしていく「連峰型」(13)の組織が適切か。従来これらの問題に対するスポーツ社会学的視点は個々のスポーツ集団のマネジメントの側面に注がれはしたが、制度や組織についての調査研究はほとんどなされなかった。大学生の大会や行事は従って「例年通り、に行われ、組織的改変もなされることは少なかった。組織や大会、財政についてのマネジメントに関する調査研究が今後、益々重要なテーマになると思われる。
- (3)(2)とも関連するが、多様化したそれぞれの〈場〉ではあるが、そこで活動する成員の満足感と定着率（現在所属している集団への参加希望はどの集団もほとんど5割に達していない）は、低いと言わざるを得ない。社会全体にスポーツ活動の〈場〉が増え、スポーツ参加を可能にする私的、公的ストックが徐々にではあるが整備される中で、着実に大学生のスポーツ参加の〈場〉は新たな拡がりをみせているのは事実である。その拡がりを一層促進し、個性に適した〈場〉の選択を可能にする「生涯スポーツ化社会」を現実のものにしたい。これまでは学校の枠組の中の集団や制度に注がれ易かった関係機関や専門家のエネルギーを〈授業〉の場以外へ、また〈学校〉の場以外へを拡げていくことが必要ではないか。
- (4)これまで実施してきた先行調査では、〈授業〉もスポーツ参加の一つの〈場〉として位置づけ、具体的にアンケートの中で、運動部や同好会と同じ選択肢として選んでもらった。今回は、〈授業〉は選択肢の中より外し、別に〈授業〉について詳しい質問項目を設けている。それによると、〈授業〉への施設、時間等の条件面、教師、プログラム等の内容面での評価はむしろ肯定的といってよい（「悪い」と答える受講学生の割合は、各条件を通して10%弱であり、同種の資料から中学、高校の体育よりも評価は高い。但し、保健体育理論の評価は著しく悪い結果がでている。これらの点に関して、至急他の機会に報告したい）。今回の〈授業〉に関するデータから類推すると、〈授業〉の〈場〉に対して下した否定的な評価と、他の様々な〈場〉を肯定的にとらえる評価とはトレードオフ的な関係ではないように思える。やはり〈授業〉の場以外に多様な〈場〉が出現し、それらに大学生が参加する中で、相対的に〈授業〉のスポーツ参加としての〈場〉としての地位は低下したと解釈すべきではないか。こういう解釈の立場にたてば、〈授業〉の場が選択制度化していくということは、他の場をそれ以上に充実、整備するという方向性がある限りにおいて、望ましい進み方ではないかと思う。〈授業〉の場が選択になった場合、女子よりも男子に、2年よりも3年に、〈場〉がない者よりある者に「とる」とする割合が高くてた。従来の〈授業〉観からすれば、〈授業〉

には一般的、基礎的、普遍的性向を有し、一方各種課外活動やグループ活動は、個性的、应用的、特殊の性向を有するものとみなされがちであった。しかし、今回のデータを〈授業〉に焦点化して解釈すれば、〈授業〉にこそ、特殊化、応用化、高度化する必要を大学生のスポーツ参加の場合、求められていると思われる。今回の調査は、大学1、2年生に対するものであったが、至急、3、4年生、大学院生、卒業生、教職員を含めて総合的、体系的スポーツ調査を実施する必要がある。

以上、得られたデータを概括的に整理しつつ、それをふまえ、問題と課題という観点から4項目に括くって示してみた。大学という制度に対する社会観念が揺れ動き出し、急激にギャップが拡がりつつある現在、大学生のスポーツ参加の問題もその域外にあるとは思えない。先行研究(6)でも引用したが、丸山真男氏のいう「タコツボ」化しやすい集団や組織状況をのり越えるということは、大学のスポーツ人にとっては、“教室”、“研究室”、“体育館”へそれぞれの〈場〉にひきこもりがちなる自己を先ず外へ出すことから始まるということかもしれないと戒の意を込めて付言し、今回の報告を終わりとす。

〈引用文献〉

- 1) 荒井貞光, 小村堯, 杉山允宏, 松本純子, 松田泰定「スポーツ行動に関する実証的研究(1), 広島県社会体育実態調査を中心に」広島大学総合科学部紀要Ⅲ, 情報行動科学研究, 第一巻, 1975
- 2) 荒井貞光, 松田泰定「スポーツ行動に関する実証的研究(2)」体育学研究, 第22巻3号, 1977
- 3) 荒井貞光, 松田泰定, 東川安雄「スポーツ行動に関する実証的研究(3), スポーツ種目選択行動について」体育学研究, 第24巻1号, 1979
- 4) 荒井貞光, 松田泰定, 東川安雄「スポーツ行動に関する実証的研究(4) 集団参加行動について」, 日本体育学会第28回大会号, 1977
- 5) 荒井貞光「スポーツを好きになる場の分析—全体的傾向と性差, 年代差」体育, スポーツ社会学研究2 体育, スポーツ社会学研究会編, 1983, 73頁
- 6) 荒井貞光「スポーツを好きになる〈場〉の実証的研究」広島大学総合科学部紀要Ⅳ, 保健体育学研究第3巻, 1985, 2頁
- 7) 岡山大学教養部保健体育教室「正課体育に対する学生の意識調査」1986年度調査実施
- 8) 九州地区生涯体育研究会「生涯体育の視点からみた大学体育のあり方に関する研究」1980
- 9) 安藤 幸「短期大学, 一つの実態」大学体育, 第32巻(第14巻2号) 1987
- 10) 荒井貞光「スポーツ集団の空間構成に関する社会学的考察——「コートの中」「コートの外」概念に着目して——」体育学研究, 第29巻1号, 1984
- 11) 荒井貞光「現代人のスポーツ行動に関するスポーツ社会学的分析と考察——成人の集団参加の分析から——」広島大学総合科学部紀要Ⅱ 社会文化研究, 第8巻, 1983, 191頁
- 12) 黒須 充「クラブスポーツと学校運動部の可能性——選手づくりの長所と短所」三好喬, 團琢磨, 荒井貞光編「スポーツ集団と選手づくりの社会学」1988, 道和書院, p.p 67-84
- 13) 荒井貞光「スポーツ集団の様相と現代的課題」三好喬, 團琢磨, 荒井貞光編「スポーツ集団と選手づくりの社会学」1988, 道和書院, p.p 26-57